

巻頭言 「ふさわしい外側」

宇野 元

薔薇をうたったリルケの詩には、折々の彼の心の状況が反映しているのがわかります。

たとえば、往来で取っ組み合いの喧嘩に遭遇して、暗い気持ちになって帰宅したところ、薔薇に慰められて平常心を取り戻す、そんな、私たちも経験するような日常にふれる詩があります。（「薔薇のはなびら」）

また、しばらく他のことにかまけていたのが、本来の自分に戻って、花器に活けた庭の薔薇を、心おきなく愛でる。つつましいけれども豊かな時の味わいを伝えています。（「きょうお前のために薔薇を」）

全ての花冠は満ちみちている 花卉は
幾百回となく 自らのなかにあり
谷に満たされた谷のように
自らのなかにあり 重みを湛えている

繊細に折り重なる薔薇の花は、心の痛みの象徴ともなります。（「薔薇の内側」）

どこにあるのか
この内側にふさわしい外側は？
どんな痛みにそのような亜麻布は当てられるのか？

イエス・キリストにある恵み。それは私たちの心の襞にこまやかに触れ、隈なく覆います。

朝の光が横溢するガリラヤ湖畔。復活のイエスが、シモン・ペトロと再会してくれます。イエスを三度否定したペトロ。大きな負い目に押しつぶされていた彼に、イエスのほうから問いかけます。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」。親しくペトロの名を呼んで、三度そうたずねます。ペトロの痛みにじかに触れるように。傷を正確に覆うように。ふさわしい亜麻布を当てるように。ペトロは「あなたをご存知です」と応答します。「主よ、あなたは何もかもご存知です。わたしがあなたを愛していることを」（ヨハネ福音書 21, 17）。壊れやすい弟子の愛に、くりかえしイエスの愛が当てられます。